

---

# 幸福の密度

沢渡 忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸福の密度

### 【Nコード】

N3746F

### 【作者名】

沢渡 忍

### 【あらすじ】

幼いころ、4歳年上の姉を失った夏海。姉の春子は小学5年生の時、壮絶なイジメを受け自ら命を絶った。父を早くに病気で亡くし、母子家庭だった幼い姉妹に訪れた悲劇。悲しみに暮れる母。小さく無力だった夏海は、なすすべもなくただ深い悲しみの中で姉を死に追いやった者へ復讐を誓う。やがて大人になった夏海はある計画を思いつく。イジメの主犯だったハセガワトモヒコ。春子の妹とは知らないハセガワの前に夏海が現れる。夏海が取った行動とは？ その時ハセガワは！

## 第1話 悲しい夜

「人間にとって一番悲しい事は何かしら？」そんな事をポツリと漏らしながら、私はマスターに追加の水割りを注文した。週末だとゆうのに客は私しかおらず、いつもは狭く感じる店内が今日はやけに広く静かに感じる。程よい間接照明の明かりと、静かに流れるジャズの音色がとても心地良い。火をつけたセーラムの煙をなんとなく見つめていると、マスターが水割りを作りながらカウンター越しにこう言った。「人生色んな事がありますけど、やっぱり一番辛いのは愛する人を失う事じゃないですかね。失うと言っても失恋とかそんな話じゃなく、肉親が死んでしまう事。親、兄弟、妻、夫、子供。特に子供に先立たれた親御さんの悲しみは想像を絶するものなんでしょうね。」「私なんかには想像も付きませんが、身を切られる想いでしょう。幸い私は子供がおりませんので、そういう辛さはこの先も体験する事はありませんが。」「どうぞとマスターが水割りを差し出した。「ありがとう。」「2杯目の水割りに口をつけた時、私は今にもういない姉の事を思い出した。別に忘れていた訳では無いのだけれど、思い出すと悲しくて、切なくて、苦しくて、言葉に出来ない喪失感に襲われるのだ。朝、目覚めると姉が亡くなったのは悪い夢で、本当はちゃんと生きていて優しい声で「なっちゃん、起きなさい」「いつまで寝てるの？」と笑顔で私に問いかける。そんなことを幾朝も繰り返し、現実に戻され私は嗚咽する。そしてその度に誓うのだ。お姉ちゃん。私はあいつを許さない。絶対に。お姉ちゃんを殺したあいつを！！

## 第2話 兆し

次の日の朝、私は携帯電話の着信音で目が覚めた。眠い目をこすりながら携帯電話を開いてみると、友人の麻紀からだった。日曜の朝から何なのだろう？と、重たい口調で電話に出る。「はい、もしもし。」「あ、夏海！私！朝早くからゴメン！あなたに頼まれてた男、現れたよ！」「え？」「え？じゃないよ！夏海！寝ぼけてんの！ちゃんと聞きなよ。ハセガワ トモヒコが現れたんだよ！」

ハセガワ トモヒコ……。私は頭の中でつぶやいた。やがてその名前は眠気を吹き飛ばし、私を現実の世界へ連れ戻す。アドレナリンが体中を駆け巡るとはこういう事なのだろうか。体が火照り、掌にはうっすらと汗がにじむ。呼吸を整えないと窒息してしまいそうな感覚に陥る。私は平静を装い、麻紀に答えた。「分かりました。ありがとう麻紀。詳しくは直接会って聞きたいんだけど、今日は時間取れる？」「私は今からでも大丈夫だから麻紀の都合のいい時間を教えて？」「うーん。そうだな、午後からならオッケーだよ。私の家においでよ。その時詳しく話すね。」「そう麻紀と約束をして電話を切った。しばらく何も考えられず、ただベッドに横たわり天井を眺めた。私は麻紀にハセガワの事を話した経緯を頭の中で整理してみた。それは半年前、麻紀が何か良いパート先を紹介してくれと電話してきた事が始まりで、私は深く考えもなしにたまたま目に付いたレンタルビデオ店の近日オープンと書かれたチラシを見て、「オープニングスタッフ募集中で書いてあるよ。電話してみれば？」と軽くすすめたつもりだったのだが、麻紀はやけに乗り気で、早速電話してみるから電話番号を教えてくださいと鼻息も荒かった。その時、冗談ばく私が麻紀に言ったのだった。「もし麻紀が面接に受かったらさ、レンタルビデオ店なら会員証を作るわけじゃない？その時もしハセガワ トモヒコとゆう名前男が来たら、私に教えて欲しいんだけど？生年月日は昭和53年生まれ。うーん、月日までは

分かんないや。とにかく住所とか電話番号とか知りたいわけよ。お願い出来る？」と、その時は半信半疑で頼んだつもりだったのだ。当然、麻紀は不思議に思ったのだろう。「あんた何それ？ストーリーカーじゃん。個人情報垂れ流しじゃん。見つかったらクビだよあたし。まあ、黙ってれば分かんないし、いいよ協力してあげる。夏海の恋を成就させてあげましょう。」と見当違いの事を言っていたが、本当の理由を説明出来るはずも無く、私も軽く「じゃ、お願いね」と話を合わせていたのだった。今思えば、あの時はもうあきらめていたのかもしれない。ハセガワ トモヒコは、姉の自殺があった直後にこの町から引越したらしい。正確には当時小学5年生のあいつにそんな権限は無く、両親が住み辛くなりハセガワ トモヒコを連れてこの町を去ったのだろう。何処へ行ったかなど、当時幼い私に知る術も無く、今に至る訳だ。でも26歳になった私には、あいつの居所を探る方法はいくつか思いついた。しかしどれも上手くいかず、半ば諦めかけていた時に、万に一つの可能性にかけてつい麻紀にあんな事を頼んだのかもしれない。麻紀は私に姉がいたことを知らない。高校に入ってからの付き合いなので、幼いころの私を知らない。暗いトンネルの中を這うようにして出口を探していた、思いつくと今でも涙がこみ上げる私の幼少期。抜け殻になった母が哀れで、私を抱きしめて泣きじゃくる母が嫌いだった幼少期。私は誰にすればいいの？やり場の無い喪失感に支配された私の幼い記憶。ただ一つ確信があったのは、あいつが姉を追い詰めた。ハセガワ トモヒコ。私は許さない。

## メモ

その日の午後、約束通り私は麻紀の家にいた。案の定、麻紀は根掘り葉掘り聞きたがった。ハセガワ トモヒコとはどういう関係なのか？どこで知り合ったのか？電話をかけてみるのか？家を訪ねてみるのか？とか、まるでテレビドラマの取調室のような光景だ。まあ、私が頼んだ事なので仕方ない事なのかも知れないが、まさか全てを話す訳にもいかない。私が返事に困っていると、さすがに麻紀も察したのか、「いいよ、夏海。言いたくないなら言わなくていい。多分、何か深い事情があるんでしょう。ただ、何か困ってるんならちゃんと話してね。私も手助けのしようがないから。また話せる時が来たら教えてちょうだい。その時に聞くようにする。ねっ、夏海。」少し寂しそうな表情で、麻紀がそつと微笑んだ。「ありがとね。」麻紀。いつか話せる時が来たら必ず話すからね。」麻紀の優しい言葉に、私は言葉少なに答えるので精一杯だった。事実を知ったら麻紀は怒るだろうか？それとも同情して一緒に泣いてくれるんだろうか？今は考えないでおこう。決心が鈍るといけない。私にはやらなければならぬ事があるんだ。そう自分に言い聞かせ、そつと心に蓋をした。それから2時間ほど麻紀と他愛も無い話をして、ハセガワ トモヒコについて書かれたメモを受け取り、私は麻紀の家を後にした。家路につくバスの中で、私は麻紀から受け取ったメモをそつと開いてみた。見てはいけないようなパンドラの箱を開くような感覚。そこには、住所、氏名、生年月日、自宅の電話番号、携帯電話の番号などが書かれていた。これでハセガワに連絡が取れる。私が密かに計画したハセガワへの報復。きつと誰にも理解されないであろう私の企み。バスに揺られてそんな事を考えていると、私は酷い睡魔に襲われてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3746f/>

---

幸福の密度

2010年10月9日04時36分発行